



FUJI WOMEN'S UNIVERSITY

No.65

Jan.20, 2018

藤

藤女子大学
広報



(中央)カトリックセンター講演会、(左右)ASEACCU 国際会議 in タイ

CONTENTS

- 巻頭言～EQの涵養——カトリック大学の卓越した使命／2
- 図書館学生スタッフSJ 愛称「LiSt」の活動紹介／3
- 未来共創フォーラム2017 報告／4
- ASEACCU国際会議2017 in タイに参加して／6
- 素顔の先生／11

巻頭 言



EQの涵養——カトリック大学の 卓越した使命

学長 ハンス ユーゲン・マルクス



前世紀の90年代以来、人の能力については、IQに加えてEQがよく話題になっています。日本語では「こころの知能指数」とも呼ばれています。それは、自己と他者の諸々の感情ないし情動を観察・識別し、こうした情報を自分の思考や行動を統括するために利用する能力であって、自己認識、自己管理ないしは自制および共感に分類されています。実際にわたしたちが人生をうまく生きられるかどうかは、「考える知性」と「感じる知性」とのバランスで決められます。

ここで問題となるのは、怒りや不安などを起こすことで後者が前者をハイジャックすることがあり得る、ということです。「感じる知性」にそれだけの力があるのは、進化の過程において、情動をつかさどる大脳辺縁系が、論理的思考をつかさどる大脳新皮質よりはるかに古い段階に出来上がり、それゆえ前者より大量な情報源を蓄えているからです。情動から来る衝動に流されず、バランスの取れた思考や行動ができるように、自分自身の中にある情動を知ることが一番大切です。この自己認識に加えて、情動を適切な状態に制御しておく自制が不可欠であって、これを備えた人には他者を思いやる共感を強める余裕もできます。

以上のようなEQに比べて、人生を成功に導く要因のうち「IQが関係するのは、多く見積もっても、せいぜい20パーセントどまりだろう」と、EQの普及に奔走したダニエル・ゴールマンは力説しています。キャリアに絞ってみれば、就職の段階では最低必須条件を計るためIQは従来通りの重要性を保持するでしょうが、

組織の中で上進すればするほどEQはますます重要になっていくでしょう。幸いにIQとは対照的に、大人になってからも、努力さえすれば、EQは増やすことができます。

増進の姿勢を身に着けさせることは、カトリック大学の卓越した使命でしょう。その達成にはとりわけ宗教教育が重要な役割を担っています。これについて二つの側面を区別しています。一つは、キリスト教、仏教などを問わず、生かされていることへの感謝、という基本的な宗教心を育むことです。わたしが今のように生きていることは決して当たり前ではありません。進化や歴史、そしてとりわけ家族など、種々多様な積み重ねがあって、わたしが生きています。いや、ただ生きているだけでなく、まさに生かされている、ということです。こうした自己認識の中からおのずと自分と同じように生かされている他者を思いやる共感とわがまを抑える自制が生まれ育ちます。

もう一つの側面は、世界の主だった諸宗教について基本的な知識を教えることです。これを身に着けた人は、世界のどこへ行こうとも、その地域に住む人々の考え方、価値判断や生活習慣などの根幹をなすものを正しく評価し、相互理解に貢献できます。グローバル化が加速する中では、異なる宗教をもつ人々との出会いも増えるでしょう。こうした日常的な接触が誤解、摩擦、衝突につながらないよう、相互理解に貢献できる人がこれからはますます必要となるに違いありません。

図書館学生スタッフSJ

愛称「LiSt」の活動紹介

図書館では2005年度より夜間開館に伴う学生スタッフを採用していましたが、今年度からは、新たに「SJ(スチューデント・ジョブ)」という名称で活動をスタートしました。SJとは、学生が自らの感性などを活かし、学内で業務に就くことです。

現在は北16条キャンパスの本館で6名、花川キャンパスの花川館で5名が活動しています。

学生たちは日常業務のほか、職員を交えて行われるミーティングに参加し、様々な意見を出してくれています。

その結果、愛称やオリジナルエプロンの作成、図書館特別展示の担当、学生選書ツアー補助、

オープンキャンパスにおける学生スタッフによる図書館案内ツアー(本館)、大学祭である藤陽祭や藤花祭での企画などを実施してきました。

今回は、両キャンパスのLiStメンバーに、これまでの勤務から感じたことなどを書いていただきました。



文学部
日本語・日本文学科 3年
S.Mさん



人間生活学部
食物栄養学科 4年
K.Iさん



利用者 と 図書館の架け橋として

私たちSJの活動は愛称を決めるところから始まりました。花川キャンパスのSJも含めた皆で案を出し合い、悩んだ末にLibraryとStudentの頭2文字を取って「LiSt」と名付けました。

今年度の活動では、選書ツアーと藤陽祭での企画が特に印象深いです。選書ツアーには、写真という自分の趣味を生かし、撮影スタッフとして同行しました。また、図書館だよりに掲載される原稿も執筆しました。藤陽祭では、藤女子大学の紹介展示及び図書館内スタンプラリーの企画・準備を行いました。展示では教員著作や卒業生の藤堂志津子さん、氷室冴子さん、乾ルカさんの作品、記念誌などの藤女子大学関係資料を並べて、ラーニング・コモンズで大学紹介DVDを上映しました。また、各展示場所にスタンプを配置して、展示をまわっていただいた方に記念品を差し上げました。年に一度の一般公開期間である藤陽祭に開催したことで、図書館や本学のPRにも繋がったかと思います。

さらに、本館のSJは毎月1回のミーティングで、今後の活動や図書館の改善案などについて話し合っています。

私は、学生がスタッフとして図書館に携わることで、より利用しやすく親しみやすい図書館づくりが可能になると考えています。実際に利用する中で見つけた改善点や、学生が興味を持ちやすい展示テーマなどは、利用者でもあるSJだからこそ見つけられるものです。今後もSJが利用者側と図書館側の架け橋となるよう、積極的に活動していきたいです。



図書館をさらに身近なものに

図書館でアルバイトを始めて3年目になりますが、今年度は業務に大きな変化がありました。図書館アルバイトがSJとなって愛称も「LiSt」に決まり、仕事の幅が広がりました。具体的には、昨年度までは土曜日みの勤務で、返却された本を棚に戻す配架作業、棚をきれいに保つ書架整齊や、本の貸出などのカウンター対応を行うのが主なお仕事でしたが、今年度からは平日の講義の合間にも勤務できるようになり、図書ラベル貼り替え等の作業が新しい業務に加わりました。

そして、今年度はSJとして選書ツアーに参加し、出欠確認や機器トラブル時の連絡など、学生や職員の補助を行いました。私は昨年度、一般参加学生としてツアーに参加したので、その経験を活かしたサポートができたと思います。

また、SJのミーティングで出た企画として、藤花祭では図書館一般公開に合わせてSJメンバーがそれぞれ自分でテーマを決めて本の展示を行いました。私は「秋におすすめの本」をテーマに本を7冊選び、ポップを作成しました。私のポップを見た方から「今度読んでみるね」などのお言葉をいただいた時には大きなやりがいを感じました。

今後もSJが携われる仕事の幅は増えてくると思います。学生として図書館を利用している立場から様々な企画の発案を行うことで、図書館と学生をさらに身近なものにできるのではないかと考えています。このようにSJも主体となって、図書館をさらに活性化していきたいです。



社会貢献推進会議 議長 小山 清文

藤女子大学は2025年に学園創立100周年の記念の節目をむかえます。それを機にして、本学は在学生・教職員・卒業生がひとつになり、さらに地域社会の方々とも交わりを拡げ、これまでの伝統を継承しつつ新たな未来につながる藤をみんなで共に創造してゆくことを「藤女子大学未来共創ビジョン」として策定し、また、本学の教育研究資源を広く開放し社会に貢献することを目的として社会貢献推進会議を設置しました。以上の趣旨に基づき、第一弾の企画として2017年の秋に「藤女子大学未来共創フォーラム2017」を開催しました。

ちょうど本学がこのような方向で動き出そうとしていた頃、折よく本学元学長の故喜田勲先生から上智大学在学時に学生寮で薫陶を受けられたという、本企画のコーディネートを献身的に推進してくださいました鉄田義人様から、元学長への恩返しとして藤のために何かお手伝いを、という大変ありがたいご提案をいただき、全3回で総計12名のパネリスト（いずれも上智大の学生寮でほぼ同時期に寝食を共にされていた方々）をお迎えしてのすばらしいフォーラムを開催することができました。元学長の故喜田先生への思いをそれぞれに胸に刻みながら、というご趣旨により、このたびはすべて皆さま無償にて貴重なお時間を提供していただきました。

今回のフォーラムは、本学の未来共創ビジョンとも絡め、「切り拓く つなぐ はばたく」という全体を貫くテーマのもとで行われました。各回とも、まずはパネリスト

による履歴や職業・業務などの自己紹介から始まり、その後テーマに即して自身の経験に基づき語ってくださったあとに、適宜司会者などによる質問をさしはさみ、最後にフロアとのQ&Aという流れで進められました。

毎回のフォーラムの楽しみは、社会の第一線で活躍されている個性のある方々がおのの多彩な人生経験に基づきながら、それぞれ独自の視点・言葉で効果的な資料とともに分かり易く語ってくださった点でした。時々繰り広げられるパネリスト同士の突っ込み合いなども親近感がわくもので会場全体を程よく和ませてくれました。現在に至るまでのあいだに経験された失敗や挫折、そういう時にどのように対応して立ち直ってきたかなどといったお話に学生たちも興味を示し大いに刺激を受けたようでした。ちょっと外側に触れてみたり踏み出したりしてみるものの大切さ、しなやかに生きることの大切さ（強さよりもしなやかさ）、マネされないものへの気付き、ことばの持つ様々な力についてなど、毎回それぞれに発せられるメッセージに私自身も励まされ教えられる点多々ありました。

本学在学生、教職員の他に卒業生の方々、また、他大学の学生や近隣住民の方々も参加していただき、とても有意義なフォーラムとなったことを嬉しく思います。コーディネーター並びに進行役を務めてくださいました鉄田様を始め、本フォーラムにご協力くださいました上智大学卒の元寮生の皆様方には改めて感謝申し上げます。現在、来年度の企画について立案中です。今後ともご支援・ご協力賜りますようよろしくお願い致します。

第1回 切り拓く～イノベーション 9月30日(土)

パネリスト

- 貫名 保宇氏 (株)産業革新機構投資事業グループ マネージングディレクター ■鉄田 義人氏 SMBCEI証券総合法人部長
■内田 忍氏 (株)博報堂ビジネス開発局長 ※全3回コーディネーター

第2回 つなぐ～他者の尊重・隣人性・国際性 10月28日(土)

パネリスト

- 西塚 智生氏 マッキンゼーヘルスケアワールドワイド ゼネラルマネージャー ■石川 明氏 (株)インキュベータ代表取締役
■平野 泰男氏 日立製作所ブランド・コミュニケーション本部本部長 ■上田 耕司氏 阪神製菓(株)代表取締役
■中村 有吾氏 (株)博報堂クリエイティブディレクター

第3回 はばたく～グローバル・地方創生 11月11日(土)

パネリスト

- 廣川 克也氏 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスインキュベーションマネージャー ■水菓子省治氏 みずほ情報総研(株) 銀行システム横断開発推進PT副PT長
兼 一般財団法人SFCフォーラム事務局 兼 ファンドマネージャー ■木谷 徳人氏 三井住友銀行 決済商品開発部グローバル商品開発グループ
■矢野雄二郎氏 宮崎県小林市観光政策参与 上席部長代理



第1回 9月30日 (土)



第2回 10月28日 (土)



第3回 11月11日 (土)



「未来共創フォーラムから学んだこと」

文学部
日本語・日本文学科 3年
K.Sさん

私はこの講演に参加して、社会の発展に対する順応性とつながりの重要性を学びました。第1回の講演で印象に残っていることは、AIについての話です。海外のAIスピーカーは話しかけるだけで物を買うことができ、そのようなスピーカーがもうすぐ日本でも発売されるだろうというお話でした。そのお話を伺った後すぐに、日本でもAIスピーカーが発売されるという情報を耳にし、パネリストの方々には常に時代の変化に合わせ物事を予測しているのだと感じました。今回の講演を通じて、刻々と進化している時代の中に入り込み、その変化について行かなければならないこと、そしてその時代の変化に対応で

きる社会人にならなければいけないことを学びました。

第2回の講演では「つなぐ」をテーマに5名の方々の話を伺いました。その中でも、新たなことを生み出すときはアイデアを100個考え、その始めと終わりの3個のアイデアの中に、思いのほか面白い答えが潜んでいるというお話がとても印象的でした。直感で選んだ3つと、考えに考えた3つの中に良いアイデアがある。これは仕事をする上で、さらに普段生活する上でもとても役に立つ考え方だと感じました。今回の講演を通じ、「つなぐ」主体は自分であり、その自分のつなぎ方次第で様々な経験が得られるということを知りました。

さらに、パネリストの方々とは同じ学舎に通いながら、同じ学生寮で生活していたとお伺いしました。今でも交流が続いているということから、学生時代における人間関係の構築も社会に出てから生きてくるのだと感じました。1つ1つの出会い、そして人との関わりを大切に、残りの学生生活を過ごしていこうと思いました。



「未来を見据えて」

人間生活学部
食物栄養学科 1年
S.Hさん

私は、このたび「藤女子大学未来共創フォーラム2017」に参加いたしました。

はじめに「切り拓く」をテーマに、挑戦することの大切さを伺いました。目標に対して前向きに行動することが、現状を切り拓くことにつながるのだと感じました。続いて「つなぐ」では、過去の自分の経験が、現在の仕事に生かされたという実体験を伺いました。今、自分のしていることを無意味だと感じたり、不満に思ったりすることは、誰にでもあると思います。しかし、そのひとつ

ひとつの行動が未来の自分につながっているのだと感じました。最後に「はばたく」では、留学という新しい挑戦をすることで、自分の世界が広がったという話をお聞きしました。自分の世界を広げる方法は、留学だけではありませんが、どんなに些細なことでも、普段と違うことに取り組もうとする精神が大切であると学びました。

今回、「切り拓く・つなぐ・はばたく」すべてのテーマを通して、私が最も重要と感じたことは、「今を大切に過ごす」ということです。例えば、苦手だと思っただけで避けていた分野の勉強をしてみたり、あまり話す機会がなかったクラスメイトに声をかけてみたりするだけでいいと思います。そうすることで、新しい発見や、挑戦してみたいという気持ちが生まれるのではないのでしょうか。今を大切にすることは、未来を大切にすることにもつながります。未来の自分が後悔しないように、一日一日を大切にしていきたいと思っています。

ASEACCU 国際会議 2017 in タイに参加して

ASEACCU(東南・東アジアカトリック大学連盟)は、日本のほかに、韓国、台湾、タイ、フィリピン、インドネシア、カンボジア、オーストラリアの約80のカトリック大学によって構成され毎年夏に加盟大学が国際会議を主催しています。会議は、講演やプレゼンテーションを交えながら、参加者が英語を共通語として意見を交わす機会となっています。

今年度の会議は、「インクルーシブ教育」(個別の教育的ニーズに対応しつつ、障がいのある人もない人も共に学ぶ教育の仕組みや環境)をメインテーマに、タイのバンコクにあるアサンプション大学で開催されました。

この会議にあわせて、加盟校の学生が主体となる「学生プログラム」も実施され、各国の若者が合宿や施設見学などを体験し、意見交換をする機会になっています。本学から参加した2名の学生による報告を紹介します。



文学部
英語文化学科 3年
N.Mさん

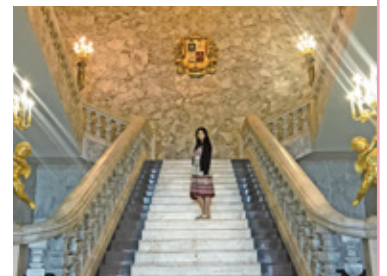
■今回のASEACCU国際会議では大変貴重な経験をさせていただきました。“Inclusive Education”というテーマのもと多くのことを学び、他の学生の宗教観に触れることで、自分の考えを深めることが出来ました。

会議の中で、自分にとっての魂や頼りにしているものについて話し合いをした際に、日本人以外の学生は聖書や宗教と答える

学生が多数でした。また直接宗教と答えていなくても、寛大さや互いを尊重するなどカトリック的な考えが多くみられました。彼らにとって宗教とはただ漠然と信じるものではなく、自分の生活、人生になくてはならないものなのです。宗教について考え、ミサなどに直接足を運んでみて、何か頼りにするもの、信じるものがあるのは素敵なことだと感じました。

また、障がい者施設の訪問や盲目の方の講演会、様々なワークショップを通して、障がい者=かわいそうというステレオタイプが彼らに対して失礼なことであると気付かされました。健常者と障がい者を同じ条件や環境で学ばせることが良いことなのではなく、同じ世界が見られるように一人一人にあった支援をすることが彼らのためになるのではないかと考えていきたいです。

今回の会議で様々な国や地域の学生、現地の方と交流して、互いを知ろうとする気持ちさえあれば、宗教、民族、人種、障がいの有無などの壁を乗り越えて仲良くできると肌で感じる事が出来ました。違いを尊重し、理解しようとする気持ちを大切にしていこうと思います。



文学部
文化総合学科 3年
I.Mさん

■今年度はインクルーシブ教育が大きなテーマとして挙げられ、5日間にわたって議論や施設への訪問がなされた。会議参加前、日本社会全体の障がい者への配慮は多岐にわたっており、この包括的な環境づくりへの姿勢や態度は大いに誇るべき点であると考えていた。今会議においても、当初の現状分析からは各国ともに障がいを持つ人々を認め、支援する

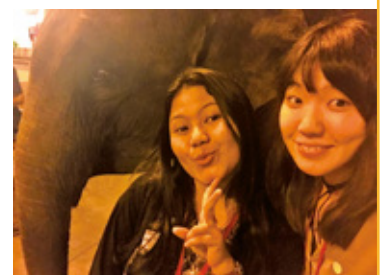
ことで社会全体の和を保つことを意識しているようだった。ただし日本の場合、“あくまで表層的であるのではないか”という意見が多くから聞かれ、研究やディスカッションを進めるにつれても深層的には無意識に互いを区別し、壁を作っているのではないかと疑問が提起された。さらに「健常者」「障がい者」という無意識なカテゴリー化が「インスピ

レーションボルノ”^{*}を代表としたメディア媒体を通じて「理想と現実との乖離」に拍車をかけているのではないかとすることも懸念された。

そこで、打開策として私たちが考えるのは、第一段階に互いを知り、理解することで認め合うこと(understand & accept)、第二段階にそれをもって互いを尊重し賞賛しあうこと(respect)、である。この段階を意識的に踏んでいくことが真の包括的な社会をつくりだす近道なのではないだろうか。

今回は、目的としていた国や文化の異なる学生からの意見を吸収し、知見を広げることができた。今後のゼミ活動や就職活動の中で積極的にアウトプットしていきたいと思っている。

^{*}インスピレーション・ボルノ(感動ボルノ):障がい者の生きる姿を、人々に感動をもたらすモノとして扱い、一方的にメディアなどで取り上げられることを批判する意味で使われる。



札幌カリタス宮古ベースボランティア

被災地でのボランティア活動



文学部
日本語・日本文学科 2年
F.Kさん

8月21日から5日間、東日本大震災復興支援ボランティアとして、岩手県宮古市で活動してきました。

震災が起きた当時、中学生だった私は、新聞やテレビから流れてくる映像に大きな衝撃を受けました。その時から、いつか被災地でのボランティア活動に従事したいという気持ちがあり、今回参加することになりました。

現地では、様々な仮設住宅の談話室をお借りして、移動カフェを開きました。移動カフェに来てくださった方々は、皆さんたいへんな境遇にもかかわらず、明るくパワフルな感じでした。そして、私たちのことを本当に温かく迎えてくださいました。手料理をふるまってくださったり、手作りの編み物をくださったり…。

中には震災当時のお話しをしてくださる方もおられました。新聞やテレビの報道で、地震や津波の被害の大きさ

はわかっているつもりでしたが、実際に被災した方の口から聞くと、想像以上の恐ろしさでした。また、町の至る所に津波の到達点を示す看板が設置されています。単なる数字だけでなく自分の目線で見ると、「こんな高さまで来たの?」と驚かされました。

今回のボランティアに参加して、改めて震災について考えさせられました。また、最初は被災地の力になりたいという思いで参加したボランティアでしたが、気が付くと逆に自分が皆さんから元気をもらっていたような気がします。

大震災発生から7年を迎えようとしている今、ボランティアの参加者は年々減っているそうです。私は今回初めてボランティアに参加してみて、実際に足を運ばなければわからないことが多いことに気づかされました。その点でも思い切って参加してみて良かったと実感しています。

この文章を読んでいただいて、少しでもボランティア活動に興味を持ってくださる方が増えたら嬉しいです。



◀浄土ヶ浜仮設住宅で「さおり織」体験



さおり織のストールを頂きました▶

宮古の今



文学部
文化総合学科 3年
E.Mさん

夏休み中、札幌カリタス宮古ベースボランティアに参加しました。

今回は東日本大震災の被災地である岩手県宮古市だけではなく、今年の台風10号で甚大な被害を受けた岩泉市の仮設住宅も訪問してきました。8月21日～25日

という短い期間ではありましたが、私にとって貴重な5日間となりました。

活動内容は主に仮設住宅の談話室を回り、いらっしゃった方々にコーヒーとお菓子をお出しし、一緒にお話をするというものです。

活動拠点の宮古市は、観光名所の「浄土ヶ浜」や鮭、鮎などの海産物が美味しいことでも有名ですが、残念ながら今回は美味しい海鮮を食べずに帰って来てしまった事が心残りです。(行かれた事のない方は是非!)ただ、浄土ヶ浜だけは宮古ベース世話人の高平さんが連れて行ってくださいました。浄土ヶ浜の海は美しく、とてもあの恐ろしい災害があったとは微塵も思えないほど静かでした。ですが宮古市の街中、と

くに沿岸部辺りでは、震災前は沢山の家が建っていたであろう所が一部更地になっていたり、建物や柱には「〇〇メートル・ここまで津波が来た」という印をよく見かけます。

東日本大震災から6年が経ち、復興に向けて進んでいるとは思いますが、災害の爪痕はいまだ深く、地元の方々の「震災を絶対に忘れない!」という強い意志を感じました。

仮設にいらっしゃった方々は、明るく親切な方ばかりで、ボランティアの私たちが逆にお世話になってしまったこともありました。「さおり織」の体験をさせていただいたり、ミョウガや紫蘇のお土産もいただきました。

津波で家を流され、知人が亡くなられたことや二次災害の怖さ、復興対策の賛否など震災前後のお話も聞くことができました。

他にも色々なお話をしてくださり、時には宮古弁まで教えてくださったり、仮設の皆さんには本当に感謝でいっぱいです。そして被災された方々が置かれている現状やその思いなどは、実際に現地に赴いて、その生の声を聴かなくてはわからないことがたくさんあることを、身をもって知りました。

活動期間中、たくさんの方々に大変お世話になりました。とくに宮古・岩泉の方々ならびに宮古ベース世話人の高平さんに改めてお礼申し上げます。

学長就任あいさつ

〈第二部〉

建学理念の再確認と一層大胆な推進 学長 ハンス ユーゲン・マルクス

1. 藤学園史の遺産

北海道におけるカトリック教会を統括する札幌教区初代教区長ヴェンセスラウス・キノルド司教は、北海道の開発復興に対する教育の役割を重要視し、教育の根幹は女子教育にあると考え、祖国ドイツに本部のある殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会に修道女の派遣を要請しました。これに応じて、シスター クサヴェラ・レーメ外二名の修道女が来日し、その崇高な愛の精神と献身的な努力によって、1925年、札幌藤高等女学校が誕生し、1947年、その土台の上に藤女子専門学校が立ち上がり、1961年、これが北海道における最初の4年制女子大学として新たなスタートを切りました。

私学を取り巻く環境が年々厳しさを増す中、8年後、藤学園は創立100周年を迎えます。牽引役を担うべき藤女子大学は、前身の藤女子専門学校の開学から今年まで、70年の歴史を刻んできました。こうした節目にあたり、高等教育全般に共通である危機を、本学にとっては、好機に変えるため、建学の理念を再確認すると共に、一層大胆な推進を決意するのが最良の取り組みでしょう。

2. キリスト教的世界観や人間観

本学がカトリック大学なので、多くの私立大学とは違って、建学の理念は、創立者個人の思想や理念だけではなく、2000年以上のカトリック教会の歴史に培われ、現在も、世界中多くの人々に共有されているキリスト教的世界観や人間観なのです。その要の一つは、神が天地万物の創造者であり、御自分にかたどり、御自分に似せて人を造られたのだから（創世記1章26-27節参照）、一人ひとりの人間が掛け替えのない存在であり、まさしくオンリーワンの一個人として侵すべからざる尊厳を備わっている、という理念です。これを土台として、本学は女性の全人的高等教育を通して、広く人類社会に対する愛と奉仕に生きる高い知性と豊かな人間性を備えた女性の育成を使命とします。

3. カトリック大学に共通の使命

すべてのカトリック大学に共通の使命を再確認するため、教皇ヨハネ・パウロ2世は20数年前に、「エクス コルデ エクレジエ」という言葉で始まる『カトリック大学憲章』を公布されました。最初の言葉を翻訳しますと、「教会の心臓部の中から生まれた」という意味で、まさに教会こそ大学を生み出した母体であると訴えています。実際、中世における大学誕生の経緯は、この言葉どおりです。

5世紀後半、西ローマ帝国が滅び、ヨーロッパに新たな社会秩序が出来上がるまでの2・3世紀の間、唯一の学問の府だったのは、各修道院付属の学校でした。10世紀に入ってから、司教座大聖堂付属学校がより大きな形でその役割を引継ぎ、こうした学校から、12世紀後半以来、パリ大学、ケルン大学などが生まれました。また、日本の文部科学省に相当する学位授与などに関する許認可の権限はすべて教皇にありました。ですから、『カトリック大学憲章』の冒頭に教皇が示唆するとおり、大学そのものが教会の心臓部から生まれたことは歴然たる事実です。

もちろん、子供が成長して、ついに親を離れていくように、大学も教会から独立してきました。その結果、近代に入ってからまずヨーロッパの大学が、19世紀から20世紀にかけてついに、アメリカの大

学も世俗化されてきました。教皇はこのこと自体を問題にしていません。むしろ、その事実を踏まえて、カトリック大学に特殊固有の使命があると力説しています。やや抽象的な表現ではありますが、そのまま引用させていただきます。

「カトリック大学の使命は、自然と人間と神の三者、すべてを含む真理を自由に探究するところにある。……それゆえ、普遍的ヒューマニズムとも言うべきものによって、真理のあらゆる側面を、神である最高の真理との本質的な関わりにおいて、ひたすら探求するところにある。」

4. 「普遍的ヒューマニズム」

神が最高の真理であることは、他の真理の絶対化を許しません。私たちが研究を通じて把握しうる真理、また教育を通じて学生に伝えねばならぬ真理は決して最終決定的なものではありません。それは真理の暫定的な側面なのです。これを謙虚に認めることは、カトリック大学に関わる者の根本姿勢でなければなりません。教皇はこの姿勢を普遍的ヒューマニズムと呼んでいます。もとより、ヒューマニズムは、中世末期から近代初頭にかけてヨーロッパ各地に広まった思想運動の名称ですが、人文主義または人道主義とも訳されているように、人間の尊厳を称えることがこの思想運動の要でした。

しばしば誤解されるように、そこでキリスト教信仰が軽んじられたわけではありません。むしろ、古代ギリシャ・ローマの文献や芸術を背景にキリスト教信仰の普遍妥当性を解き明かす努力が積み重ねられたのです。その成果は、宗教改革の後しばらくヨーロッパを揺さぶった戦争の間にも忘れられることなく、近代哲学の貢献を経て、ついに基本的人権の承認につながりました。そういった意味において、ヒューマニズムが普遍的になりましたが、そもそもキリスト教信仰の中から生まれてきたことは歴然たる事実です。

5. 大学のステークホルダー

この尊い伝統を誇り、独自の教育と研究を通じて、社会にアピールすることは、カトリック大学にとっては、教会から与えられた使命を果たす上だけでなく、すべての大学が今さらされている危機を切り抜けるためにも最良の選択でしょう。実際、大学に今一番要求されているのは、社会のニーズに応えることです。

株主を意味する「ストックホルダー」という言葉に因む「ステークホルダー」という言葉も最近よく使われるようになってきました。ストックホルダーは一定の企業に出資して配当という利潤を得ますが、一方、ステークホルダーは、株主ではないけれども、一定の企業の成功、不成功、成長などに絶大な関心を寄せます。

学校にとって、誰がステークホルダーでしょう。学生とその保護者、さらに卒業生に加えて、社会全体がステークホルダーです。したがって、大学は日々刻々と変化している社会のニーズに応えるため、自らのあり方を見直し、必要な場合に迅速かつ柔軟に変えなければなりません。こうした自己改革の意思と能力のある大学が生き残ることができるでしょう。

大学へのご支援ありがとうございます

藤女子大学の寄付募集活動は、みなさまの温かいご支援により、2012年度からの累計が1億3千万円に達しました。寄付募集につきまして深いご理解とご協力を心よりお礼申し上げ、ここに感謝の意を表しご芳名を掲載させていただきます。2017年度のご寄付につきましては、次号の広報「藤」にて、使途等をご報告いたします。

寄付者ご芳名(第11回) 期間 2017年4月1日~2017年9月30日(敬称略・お申込順)

〈保護者〉	〈卒業生〉	〈旧教職員・旧役員〉	〈教職員・役員〉	〈その他、法人等〉
三上 修 柴山 信一郎	瀬川 昌代	知地 英征 匿名 1名	永田 淑子	愛知株式会社 札幌営業所
米田 和志 石田 俊恵	山口 博子	田中 彌八 計 5名	佐々木 壽幸	所長 米沢 賢司
佐藤 守 酒井 俊一	小林 義子	三浦 良一		
市橋 弘光 津嘉田 雅人		高橋 セツ子		
佐藤 征一 浪内 敏彦	匿名 2名		匿名 2名	計 1件
伊藤 敏文 西 勝美	計 5名		計 4名	計 57件 1,390,000円
田中 克志 影浦 誠				
長尾 貴司				
川浪 孝子 匿名 25名				
小笠原 芳隆 計 42名				

2012年度実績：377件 12,081,866円 2013年度実績：227件 17,413,757円
 2014年度実績：191件 76,223,954円 2015年度実績：181件 6,402,354円
 2016年度実績：179件 16,758,365円

2012年4月~2017年9月末までの累計 **130,270,296円**

ご寄付のお願い

藤女子大学は、財政基盤をより強化して教育研究環境の整備と学生支援体制のさらなる充実を図り、創立の精神に基づいて女性の育成に努めてまいります。今後とも、ご支援をいただければ幸いです。

【募集金額】

〈個人〉
 1口1万円(なるべく2口以上のご協力をお願いしておりますが、金額にかかわらず有り難くお受けいたします)
 〈法人・団体〉
 金額は特に定めておりませんが、格別のご協力をお願いいたします。

【お申込み・払込み方法】

寄付申込書をご送付の後、お近くの郵便局・銀行から下記口座宛にお振り込みください。なお、本学専用の払込用紙で郵便局から払込手続きをされますと、手数料が無料になります。寄付申込書・払込用紙等をご入り用の際は、本学寄付金募集窓口にご連絡ください。
 郵便局 振替口座 02780-7-50398 藤女子大学
 銀行 北洋銀行 北七条支店 (普) 3989004 藤女子大学 募金口
 北海道銀行 札幌駅北口支店 (普) 1185721 藤女子大学 募金口
 三菱東京UFJ銀行 札幌支店 (普) 4021677 学) 藤学園 藤女子大学

財務課寄付金募集窓口 TEL : 011-736-5044 FAX : 011-736-5230 E-mail : zaimu@fujijoshi.ac.jp URL : http://www.fujijoshi.ac.jp

学内ニュース

2017年6月~12月に下記の行事、講演会等を実施しました。

- ❖ **2017年度教職課程特別連続講座【6回開催】**
 5月27日(土)、6月24日(土)、7月22日(土)、
 10月15日(日)、11月4日(土)、12月2日(土)
- ❖ **カトリックセンター講演会【各キャンパス2回開催】**
 北16条キャンパス 7月18日(火)、11月28日(火)
 花川キャンパス 7月21日(金)、12月1日(金)
- ❖ **第19回家庭科教育研修講座** 7月22日(土)
- ❖ **英語で楽しもう! Let's Enjoy English** 8月9日(水)~10日(木)
- ❖ **日本語・日本文学科特別公開講演会** 9月7日(木)
- ❖ **英語文化学科公開講演会** 9月8日(金)
- ❖ **キリスト教文化研究所公開講演会—世界の古典「聖書」—** 9月14日(木)
- ❖ **人間生活学部 オホーツク地区保護者懇談会** 9月18日(月)
- ❖ **実験動物慰霊式** 9月25日(月)
- ❖ **英語文化学科主催 ニール・ホール氏朗読会** 9月25日(月)
- ❖ **藤女子大学 未来共創フォーラム2017**
 9月30日(土)、10月28日(土)、11月11日(土)
- ❖ **藤女子大学 大学祭**
 花川キャンパス 10月7日(土)~8日(日)
 北16条キャンパス 10月14日(土)~15日(日)
- ❖ **食物栄養学科同窓の集い** 10月7日(土)
- ❖ **英語文化学科主催 English for Kids 2017** 10月15日(日)
- ❖ **文化総合学科公開講演会** 10月15日(日)
 ※教職課程特別連続講座と共催
- ❖ **慰霊祭** 11月2日(木)
- ❖ **キリスト教文化研究所秋の公開講座—教会と音楽—** 11月4日(土)
- ❖ **外国語教育研究センター主催 藤女子大学公開講演会**
 12月10日(日)
- ❖ **図書館情報学課程主催 公開講座「土曜講座2017」**
 12月16日(土)、12月23日(土)

心よりご冥福をお祈りいたします。

元藤女子大学 副学長・人間生活学部 人間生活学科 教授 **川中 なほ子** 様



2017年10月17日ご帰天 88歳
 1929年1月24日東京都に生まれる。1952年東京女子大学文学部哲学科卒業、1956年英国オクスフォード大学大学院宗教学専攻修士課程修了、1957年聖心女子大学哲学科講師、1977年上智大学一般外国語講師(英語)、1992年~1999年藤女子大学人間生活学部教授、1992年~1996年人間生活学科主任、1997年~1999年藤女子大学・藤女子短期大学副学長。
 人間生活学部開設時(1992年)に学部教授・人間生活学科主任として着任され、後には副学長を併任し藤女子大学を支え、学生の教育に力を尽くしてくださいました。



2017年11月1日ご逝去 81歳
 1936年7月11日北海道に生まれる。1960年広島大学教育学部教育学科卒業、1960年室蘭大谷高等学校教諭、その後、道内各地の高等学校や教育庁で勤務。東川高等学校校長、中標津高等学校校長、札幌西高等学校校長、北海道教育庁網走教育局長などを歴任、2000年~2002年藤女子大学文学部文化総合学科教授、社会科・公民科教育法や生徒指導等教職課程科目をご担当され、教職を志す学生にご指導くださいました。

私のカレッジライフ ～社会活動編～

学科に根ざした社会活動をしている学生のカレッジライフ



文学部
英語文化学科 3年
M.Sさん

将来のビジョン

大学の授業では、英米文学といった学問から今後の社会生活の基礎となる知識まで、幅広く学んでいます。またその中では、物事をあらゆる角度から考える素地も身につけてきました。これからは学んだことを日常生活の中に反映させ、社会人として生かしていけるように努めたいです。これからの時代、海外の方が訪日される機会はますます多くなります。そこで私は、そのような人々を手助けできる活動に参加する機会を増やし、自身の英語力にも磨きをかけ続けたいと思っています。

現在参加している社会活動について

週に一回ボランティアとして、近隣の白楊小学校の外国語活動の時間に英語を教えに行っています。6年生2クラスの児童のプランを練り、練習し、授業に臨みます。プラン作りでは、どのような内容だと子どもたちの学習がはかどるのか、英語で話せるようになるのか等を意識しながら真剣に取り組んでいます。自分たちが指導することで子どもたちが積極的に授業に参加している姿を見ると活動の意義を実感します。大人数の前で立つ授業することは緊張しますが、それ以上に英語でコミュニケーションを図る楽しさを伝えたいという気持ちが勝り、毎回実習の日が楽しみです。また実際に授業してみると、児童の思いがけない反応から得る発見や授業の改善点も多く見付き、大変貴重な経験になっています。同じ児童英語活動をしている学生同士でも情報を交換し、より良い授業づくりのために日々努力を続けています。

社会活動と授業のつながり、授業への取り組み方

小学校英語指導者の資格取得に向け、児童英語関連の授業を2年間受講しています。授業では、子どもに英語を教えるスキルを習得するために、座学と実践を通して学んでいます。夏には4日間の集中講義があり、後半2日間は地域の子どもを招いて授業実習を行います。その際は、指導内容から教材まで全てを自分たちの力で準備し、本番に向け練習を重ねます。普段の成果が試されることは勿論、子どもと英語で触れ合える良い機会でもあります。準備は大変ですが、前年も参加してくれた子どもが再度参加してくれたり、自分のことを覚えてくれたりすると、大きなやりがいを感じます。また藤陽祭ではハロウィンに関連した英語レッスンを開催し、楽しく活動しています。毎年多くの子どもたちが来てくれ、レッスンは大盛況です。今後もこのような活動に積極的に参加していきたいと思っています。



人間生活学部
人間生活学科 3年
K.Kさん

将来のビジョン

将来は、社会的養護を必要としている子どもを支援するような施設で働きたいと考えています。社会的養護を必要としているにもかかわらず、自ら「助けて」と声をあげられない子どものそばに寄り添いながら社会制度等につなげる支援をしていきたいです。そのために、大学で社会福祉士の受験資格を取得できる講義を受け、国家試験に合格することが第一の目標です。

現在参加している社会活動について

ボランティアサークル「THEセツルメント」の活動や児童養護施設への訪問、雪まつりのボランティアスタッフなどのボランティア活動をよくしています。そこでは主に、子どもと遊んだり子どもたちが楽しんでくれるようなイベントを自分たちで企画して行っています。大学入学後、サークルでの活動をとおして、人のために何かをしてそこで楽しく思ってくれたり笑顔がたくさん見られたりすることが、自分にとっても楽しく好きなことであると気がきました。ボランティアでは、子どもに関わる機会が多く、その関わりの中で子どもの純粋な可愛さに触れ、もっと子どもたちが楽しめるようなことをしていきたいと思うようになりました。このような思いから積極的にボランティアを行っています。

社会活動と授業のつながり、授業への取り組み方

児童養護施設でのボランティア活動では、そこで生活している子どもの行動の意味を児童福祉論の授業で学んだことと結びつけることができている。それにより、実際にどのような行動が愛着行動かなどを知ることができています。私は将来子どもに関わりたいたいと考えているので、授業で学んだことをボランティア活動をとおして実践することで、より学びを深めていければと思っています。

社会福祉士になるために、国家試験の指定科目である授業は私にとって特に重要です。これからは、ゼミナールの学びでも合格に向けて対策をしていきます。



素顔の先生 第7回

文学部 文化総合学科

松本 あづさ先生



「素顔の先生」第7回目は、文学部文化総合学科で日本史科目を担当なさっている松本あづさ先生にインタビューを行いました。普段の授業のなかでは聞くことができないお話をお聞かせいただき、とても楽しく有意義な時間となりました。

Q1. 先生が普段の生活で楽しみにしていることは？

家でテレビドラマを観る時間が幸せです。最近は連続ドラマを全部観ることは少ないですが、たまたまやっている回を観るだけで十分リフレッシュになっています。あとは、旅行に行くのを楽しみにしています。お仕事で行く旅もありますが、そうではない旅に年一回は行きたいと思っています。旅行といえば、大学院生の時に出会った博物館の学芸員さんに、初対面で「松本さん、旅をしてください。」と言われたことがあって。それ以来意識して旅行しているというのもあるかもしれません。『地球の歩き方』などの旅行誌を買うのも楽しみです。あと、食べることも日常の楽しみの一つです。でも炭水化物が大好きなので、気をつけなければいけないと思っています。

Q2. 他の先生との交流はありますか？

一昨年冬に、伊藤先生・石井先生とイタリアに行きました。この時は、サバティカル（研究休暇）で渡邊先生がイタリアにいらっしゃったのでローマを案内していただきました。また、渡邊先生のご紹介で、イタリア留学中の日本人シスターの方々と交流できたことも楽しかったです。伊藤先生・石井先生とは、列車でピサやフィレンツェにも出かけました。この旅行でもよく笑いましたが、文化総合学科の先生方は日頃から「笑い」を大事にしている印象があって、助けられることも多いです。

Q3. どんな大学生でしたか？ また、アルバイトはどんなものをしていましたか？

高校は部活中心でしたが、大学で日本史研究室に所属してから少しずつ勉強中心になりました。江戸時代に興味を持ってから、研究が楽しくなったのです。勉強だけではなく、研究室の仲間との飲み会もとても楽しかったです。大学院生の時は北海道博物館でアルバイトをしていました。北海道博物館で古文書の読み方や扱い方、資料整理の方法など色々なことを学ばせてもらいました。経験豊かな学芸員さんたちとの出会いを含め、北海道博物館での時間はとても大きなものだったと今でも実感しています。

Q4. なぜ、江戸時代に興味を持ったのですか？

最初、古代史に興味を持っていたのですが、授業で蝦夷地について書かれた古文書や絵図に触れてから江戸時代に興味を持ちました。また、自分で歩いて探せば、あまり知られていない大事な古文書に出会えることも魅力に感じました。近世史ゼミの恩師である井上先生の「楽しく、小さくまとまらない」という言葉は今でも励みになっています。一つ一つはささやかなものですが、研究を続けたいと思うきっかけになりました。

Q5. 今後のビジョンは何ですか？

学生時代から取り組んできた研究を本という形にできたらと思っています。真面目で堅い研究書のなかにも、著者の信念と努力が詰まった1冊に出会って胸を打たれることがあります。人の心に響くかどうかは別にして、まずは自分が納得できる本を書くことができればと思っています。



文学部
文化総合学科2年
H.Yさん

今回のインタビューは本当に楽しくて貴重な機会だったと思います。先生のお話を聞いて、学生時代の人との出会いはその後の人生に影響することもあるということを感じ、私も人との出会いを大切にしようと思いました。



文学部
文化総合学科3年
K.Mさん

普段の授業では聞けないような、先生の素顔のお話を聞けて楽しかったです。和気あいあいとした時間で、藤の温かさを感じました。松本先生は学生時代の恩師の方たちの教えを大切になさっているのだと感じました。



文学部
文化総合学科3年
K.Rさん

ゼミ生でも全く知らなかった先生の過去のお話や近世についての貴重なお話を聞くことができとても楽しかったです。日々のきっかけが現在につながっているのだと感じたので、私も日々を大切にしたいと思いました。

今回は、1世紀から4世紀初頭の間、ローマ時代における殉教者たちに焦点を当てたいと思います。ローマ帝国は諸国・諸民族を支配する広大な帝国となり、多民族帝国の方針として、支配した民族や国の宗教に寛容な立場をとっていました。それなのに何故、キリスト教徒たちが迫害され、殉教していったのでしょうか？

まず挙げられるのは、多神教社会であったローマ帝国において、キリスト教は厳密な一神教であり、偶像に献香したり、偶像に供えられた食物を食べるのを拒否したこと。また、皇帝崇拝が求められるようになった時、それを断固として拒否したことがあげられます。皇帝崇拝は、帝国に対する忠誠の絶対的な要件として求められました。

さらに、キリスト教徒は身分の違いに関わらず、兄弟姉妹として一致していたこと。特に、当時の厳しい奴隷制社会の中で、奴隷が自由民と同じ集いに参加し、同じ仲間として加わることができたことは、理解されませんでした。

キリスト教徒たちの間で一番大切にされたミサにおいて、キリストの体と血とされるパンとぶどう酒を口にすることが、人肉食をしていると誤解されたこと。これは16世

紀に日本に入ってきたキリスト教が、同じような誤解を受けたことを思わせます。

また、迫害の中で祈るために、キリスト者たちはよく地下墓地であるカタコンベに集まっていたが、それが秘密結社のような印象を与えたこと。

その他、多くの理由があるのですが、紀元64年のネロ皇帝による迫害に始まり、95年のドミチアヌス皇帝の迫害、303年のディオクレティアヌス皇帝による迫害などが有名です。多くの殉教者たちが、競技場において十字架上で火炙りになったり、猛獣の餌食になったり、残虐な方法で命を奪われました。いえ、正確に言うと、彼らの命を捧げてキリストへの信仰を証しました。初代教会は彼らの信仰をたたえて、そのお墓の上に教会を建てるようになり、墓の真上に祭壇が置かれるようになりました。



競技場で血を求める大群衆の前で殉教していくキリスト者たち

花川キャンパス図書館【花川館】

図書館【花川館】にアクティブラーニングスペースができました。学生のみなさんどうぞご利用ください。

